

日本語指導が必要な生徒の高校卒業を支える要因

— 定時制高校の事例から —

幅 崎 麻紀子*

庄 司 一 子**

問題の背景と研究目的

近年、グローバル化により国際的な人の流動性が高まる中、本邦の在留外国人数も増加しつつある。在留外国人の本邦での居住期間の長期化により、本国から配偶者や子どもを呼び寄せるケースが増加し、このような状況を受け、学校教育においても、日本語指導が必要な外国人生徒の教育は喫緊の課題となっている。日本で学ぶ外国人生徒については、就学問題、学校への適応、日本語の学習、進学問題、アイデンティティの問題等、学校生活においては、多くの困難に直面することが報告されており、様々な研究の蓄積がある。増加する外国籍生徒への対応についても様々な施策が導入されつつある¹⁾。

しかしながら、施策の中心は小・中学校である。文部科学省の調査によると、日本語指導が必要な児童生徒のうち、小中学校においては、ひとりひとりに応じた指導計画による「特別の教育課程」によって日本語指導を受けている割合は増加し、平成 26 年度導入時には外国籍の生徒の 23.9%であった比率が、4年後の平成 30 年度には 60.8%に上昇している。

高等学校へ進学する外国籍生徒の数も上昇している。平成 30 年現在、日本語指導が必要な高校生は平成 20 年の 2.7 倍となり、その数は 4,172 人と報告されている(文部科学省, 2020)。しかしながら日本語指導が必要な高校生のうち、

特別な指導を受けている生徒数は増加しつつも、各学校の対応が外国人生徒の増加に対応していないため、特別な指導を受けている生徒の比率は、10 年前には 76.8%であったが平成 30 年度は 67.6%と減少しているのが実態である。

1. 日本語指導が必要な生徒の進学先としての定時制高校

日本語指導が必要な高校生の進学先の受け皿となってきたのが、定時制高校である。平成 30 年度の調査では、高校に在籍する日本語指導が必要な外国籍生徒 3,677 名のうち、全日制に在籍する生徒は 42.7%、定時制に在籍する生徒は 56.8%と、半数以上の生徒が定時制高校に通っている。

高等学校における定時制教育は、もともと、就業等のために全日制高校に進学のできない学齢期の子ども達への後期中等教育を提供するために設置されたものである。近年では、社会状況が変化する中、定時制高校の生徒数も学校数も激減している²⁾。不登校経験者、進路変更等による転入学者等、多様な事情を抱える生徒に対応する学校として、その役割が変化しつつある。定時制高校が大きく変容したのは、1990 年代から 2000 年以降で、定時制と一口に言ってもその運営方法は多様で、夜間定時制の他、履修科目の選択による三部制の単位高校も設置されている(佐久間, 2015)。

近年では、定時制高校が、日本語指導が必要な外国に繋がる生徒への教育の場として定着しつつあり、どの学校も外国に繋がる生徒の在籍

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程

** 筑波大学人間系

者数が増加している。定時制高校に外国に繋がる生徒が集まる理由は、受験者が定員に満たないためである。入学試験を課しているが、高校側では、定員内不合格者を出さないため、日本語力に問題があったとしても合格が可能である。

定時制高校は今や日本語指導の必要な外国に繋がる生徒の通う学校となっている実態にも関わらず、文部科学省は、高校での日本語学級の開設を容認していない。その理由は、高校は入学試験を実施し、学力の面でも適格と判断される生徒が進学してくることが前提となっているからである。

高校入学については、学校教育法施行規則第90条で規定され、その第1項で、入学者の選抜に基づいて校長が許可すること、第5項で、学力検査は当該高校を設置する都道府県または市町村の教育委員会が行うことが定められている。

外国から移住をして間もない生徒達にとっては、全日制の高校に合格することは容易なことではない。高校入試にかかわる特別措置や特別入試枠には地域格差がある³⁾。例えば、東京都の場合は、来日3年以内については、特定の高校において、「在京外国人生徒対象の入試」を受験することができる。その場合の試験は、作文及び面接のみで、言語については、日本語または英語のどちらかを選択することが可能である。また、来日6年以内の外国籍の受験者で、日本語指導を必要とする場合は、ひらがなのルビを振った問題で受験することができる（東京都教育委員会，2020）。一方、隣県である埼玉県の場合は、「外国人特別選抜による募集」はあるものの、出願資格は来日3年以内で、試験問題として国語、社会、理科の学力検査は受検しないものの、一般受験と同じ問題である数学と英語を受検しなくてはならない（埼玉県教育委員会，2021）。

高校入試に外国人特別枠があったとしても、日本語で書かれた文章を読んだり書いたりする能力は必須であり、その入試を突破することは簡単なことではない。そのため、受験者数が定員に満たず、受験した生徒全員を合格としている定時制高校は、日本語が不自由な外国に繋がる

生徒にとって、後期中等教育進学のための「貴重なセーフティ・ネット」（佐久間，2015）の役割を果たしている。

しかしながら、入試を突破して定時制高校に入学しても、入学後も日本語に苦勞している生徒は少なからずおり、また、中途退学者が多いことも課題として挙げられている。特に、女子の中退率が高いことが指摘されている⁴⁾。

2. 定時制高校が抱える課題

定時制高校の場合、全日制に比べて中途退学者が多いことが問題視されてきた。中途退学者とは、文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、「退学者とは、年度の途中に校長の許可を受け、又は懲戒処分を受けて退学した者等をいい、転学者及び学校教育法施行規則の規定（いわゆる飛び入学）により大学へ進学した者は含まない。」と定義されている（文部科学省，n.d.）。

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成30年度）」（文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課，2019）によると、日本語指導が必要な高校生等の中退率は9.6%（在籍生徒数3,933人、中途退学した生徒数378人）であり、全高校生の中退率の1.3%（在籍している生徒数2,295,416人中、中途退学した生徒数28,929人）と比較すると、著しく高い状況にある。また、進学率については、全高校生等750,315人中、高校卒業後に大学や専修学校等の教育機関等（短期大学、専門学校、各種学校を含む）に進学した生徒数は533,118人で、進学率は71.1%である一方、日本語指導が必要な高校生等については、卒業生数704人、進学者数297人で、進学率は42.4%と、日本人生徒との間に大きな差がみられる（文部科学省，2021a）。

これまで定時制高校に進学する日本語指導が必要な生徒の増加の要因を、受験をする生徒の側から見てきたが、学校側においては、こうした生徒を受け入れる体制はできているのだろうか。

文部科学省では、日本語指導が必要な高校生

の増加に対応するため、2021年度より、高等学校においても、「日本語指導を推進するための検討及び日本語指導のカリキュラムづくり等のための指導資料の開発」を開始し、2021年10月に、高等学校における日本語指導の在り方に関する検討会議の報告をまとめたところである（文部科学省、2021b）。

3. 先行研究の検討

定時制高校における「日本語指導」あるいは「外国に繋がる生徒」を扱った先行研究は、非常に少ない。学術誌と研究紀要の双方を検索することが可能な国立情報学研究所のNII論文情報ナビゲータ（CiNii）を利用して、「定時制高校」と「外国（人）」あるいは「日本語指導」を検索した結果、それに該当する先行研究は、わずか22件であった。その内容についても、外国に繋がる生徒への授業や保護者対応について、教育の公正さの視点からの考察（角田，2012）、商業高校定時制の外国に繋がる女子生徒のエスノグラフィー（小川，2020）、日本語指導体制（高松，2011）、中国人ニューカマーの進学（許，2018）、外国人生徒の学びを深めるためのアクションリサーチ（黒田，2021）等があるものの、定時制高校の卒業に導いた経験を分析した研究は見られない。それゆえ、本研究では、定時制高校における日本語指導が必要な生徒の卒業に着目して、卒業へと導く要因について研究するものである⁵⁾。

4. 研究目的

日本語指導が必要な高校生を受け容れる定時制高校の課題として、これまで、中途退学の多さや進学率の低さ等、その問題点が多々指摘さ

れてきた。しかしながら、定時制高校に通う日本語指導が必要な生徒の中には、4年間通学し、単位を修得して卒業し、進学を果たしている生徒は少なくない。外国に繋がる生徒が多数在籍する定時制高校は、多文化共生のモデルとなる特徴を備えていると捉えることが可能である。

そこで本稿では、日本語指導が必要な生徒にとっての定時制高校の通学経験とはどのような経験なのか、生徒は日本語のハンディキャップを乗り越えて、どのように成長をしているのか、定時制高校を卒業にまで導いた要素について、事例を用いて検討する。その上で、外国に繋がる高校生の卒業に至る支援について提言したい。

研究方法

第一筆者（以下筆者）は首都圏内にあるA高等学校定時制において2019年、2020年、2022年⁶⁾に、日本語指導が必要な外国に繋がる生徒3名⁷⁾に、半構造化インタビュー及び参与観察を行った（Table1）。3名の生徒はいずれも2018年度入学の女子生徒である。1回の面接時間は45分であった。

インタビューは協力者のプライバシーに配慮し、且つ、安心して話をするができるよう、A高校の休憩室にて実施した。協力者には、最初に本研究の目的と守秘義務への配慮、研究の協力はいつでも撤回することができること、聞き取ったデータは研究以外の目的には使用しないことを伝え、調査への協力の同意を得た。その上で、インタビューガイドを用い、それに沿った質問を行った。インタビューでの自発的な語りの流れを重視し、生徒にはできるだけ自由に語ってもらった。なお本研究は、筑波大学人

Table 1 2018年度入学の外国に繋がる生徒の卒業状況等

	高校入学時の年齢	高校入学時の日本在住歴	高校卒業の有無	高校卒業後の進路
Xさん	20歳	3年	卒業	進学
Yさん	18歳	5年	卒業	就職
Zさん	15歳	1年8か月	転校	

資料：筆者フィールドノート

間系の研究倫理審査の承認を経て実施した。

参与観察の場として具体的には、授業や休み時間、行事等に参加して、その様子をフィールドノートに記述し、インタビューデータに加えてフィールドデータとして本研究に用いている。

結果

1. A 高校定時制の外国に繋がる生徒の在籍・卒業状況

A 高校定時制は、定員数 40 名に対し、約 10 年前から定員割れとなっている。入学試験の点数が著しく低い場合でも合格を出しているため、毎年数名の外国に繋がる生徒が入学している。2018 年度以前にも中国籍や韓国籍の生徒、フィリピンやタイとの二重国籍を持つ生徒等、外国に繋がる生徒が入学している。しかし、彼女たちは、日本の中学校での就学経験があり、日本語についてもコミュニケーションに困る状況ではない生徒達であった。

2018 年度、初めて、ほとんど日本語が通じない、すなわち日本語指導が必要な生徒が入学してきた。その年の入学者は 16 名で、そのうち日本語指導が必要な外国と繋がる生徒は 4 名であった。2 名は、片親が日本人であり⁸⁾、日本での居住経験が小学生の頃にもあったが、2 名は両親とも外国籍で、彼女たちの中学校までの教育は、全て母国で受けている。

2018 年度に入学した 4 名のうち、4 年後の 2021 年度に A 高校を卒業したのは、X さん、Y さんの 2 名のみであった。卒業後の進路は、X さんは専門学校へ、Y さんは企業に正社員として就職している。2 年生時に単位制の定時制高校へ転校をした Z さんは、X さんの話によると、同時期に高校を卒業し、大学に入学が決まったそうである。Table 1 は当該学年の日本語指導が必要な生徒のうち、聞き取り調査を行った 3 名の生徒の日本在住歴及び卒業状況等を示している。

この学年の場合、16 名（日本人を含む）入学した生徒のうち、1 年生で 2 名が退学もしくは転学し、2 年時には新たに 2 名が転入し 16 名と

なったものの、2 年生の途中で 2 名が転学した。

4 年時には 14 名の生徒となり、14 名全員が卒業している。卒業後の進路は、大学・短大・専門学校へ進学した者 6 名、正社員として就職した者 5 名、その他が 3 名であった。

2. 外国に繋がる生徒の高校選択の背景

ここでは、高校を 4 年間で卒業した X さんと Y さんに焦点を当て、卒業に結びついた要因について、彼女らの語りから分析することを試みる。

X さんは、母国ネパールにて 9 年間の就学を経て、父が暮らす日本へ移住してきている。父は彼女よりも 10 年前に来日して飲食店で働いており、X さんは母や姉弟とともに来日している。同居家族は父母、弟・妹で、母は弁当屋で働いており、妹は高校生、弟は中学生として日本の学校に通学している。父の兄弟とその家族は、皆日本で働いており、日本に親族のネットワークがある。

Y さんは、フィリピンで生まれ、小学校 5 年生で来日し母と暮らしている。日本の小学校を卒業し、日本の中学校を卒業した後、母の母国であるフィリピンに戻って叔父の家で 1 年間暮らした。その後再来日し、1 年後の 17 歳の時に A 高校に入学した。国籍はフィリピンと日本の両方を持っている。

1) A 高校定時制の選択

X さんも Y さんも、経済的な理由から定時制高校を選択している。日本に移住してから X さんは 3 年、Y さんは 5 年経過しているが、どちらも高校入学前の数年間は日本の学校へ通学していない。また、家庭の中では日本語を話す環境にはないため、日本語指導の必要な生徒と判断されている。

A 高校定時制を選択した理由は、日本語力の低さに加え、昼間働かなくてはならないという経済的な理由によるところが大きい。

X さん：（高校へ入る前）3 年間は仕事をしながら学校を探していた。日本語の学校はすごくお金がかかる。こういう（定時制公立高

校) 学校があることは知らなかった。安い学校のことを知ったのでこの学校に来た。

(2019年2月13日)

Yさん:夜間に来たのはお金が必要だから(中略)、例えば昼間働きたいから、この学校を選びました。お金が要る。(2019年2月5日)

A 高校へ入学するまでに時間がかかっていることも特徴的である。Xさんは3年間、Yさんは1年8か月間、学校へ通わずに過ごしており、その間、Xさんは働いていたが、Yさんは「家にいた」と語っている。外国人生徒は情報の点においても弱者であり、すぐに日本の学校に入学することは難しい。

2) 家庭環境

XさんもYさんも、入学当初から、「卒業したい」と語っている。彼女たちが高校へ入学した理由として挙げているのが大学への進学である。XさんYさんともに、大学へ行くことで良い仕事に結びつくものと考えており、そのための資格として高校を卒業する必要があると捉えている。

しかしながら、それは必ずしも日本の大学という訳ではない。XさんもYさんも、日本に来た理由は自らを選んできたというよりも、家族の仕事の事情によるものである。Xさんの場合は、父母が日本で働いており、そこに合流する形で呼び寄せられている。Yさんの場合は、母親が日本で働くために、日本国籍を持つ娘と一緒に暮らすことが必要だからである。Yさんは、フィリピンの大学へ行きたいとの希望を持っているが、親の状況を理解して、日本に暮らしているのである。

両者とも日本語を話す家庭環境に暮らしているわけではない。Yさんの家庭は母一人子一人の母子家庭である。母は介護の仕事についているが、日本語はあまりできないとのことで、家庭で日本語を話す機会はない。Xさんの場合も、父母はネパール人で、家庭ではネパール語を話しており、学校やアルバイト先以外では、日本語を話す環境にはない。それゆえ、日本語を学ぶ機会が限られているため、日本語力の向上が

難しい。

3. 卒業をした生徒の4年間の気持ちの変化

1) 1学年時の状況

1学年在籍時のXさんYさんの学校生活の満足度は、総じて高くはない。Xさんは、生活の充実度について、「充実していない」「満足していない」と答えている。その理由は、ネパールでの同級生と比較し、母国の友人は皆大学へ行っているが、Xさん自身は高校に在学しており、友人のように進学していないことを悲観して捉えているからである。入学した当初は、自らの置かれた状況について、母国にいた場合の状況と比較する言葉が出てくるのが、特徴として見られた。

また、特に両者が語っているのが、日本語の難しさである。A高校定時制には、多文化共生推進員⁹⁾が派遣されており、授業前に日本語の補習授業を行うと共に、授業中の日本語の支援を行っている。A高校ではそれまで多文化共生推進員はおらず、日本語の支援が必要な彼女たちのために、学校が県教育委員会に申請することによって実現したものである。XさんYさんのいる学年には、4年間、多文化共生推進員が日本語の支援を行っていた。

こうした日本語の支援にも関わらず、Yさんは日本語について、「難しい。私、しゃべるのが難しい。自信がないんです。何か間違ったりするから、怖い(2019年2月5日)」と語っている。在日歴が5年以上あるYさんは、4年生時に日本語検定3級を受けて合格しており、日常的な日本語について理解することができるレベルにある。しかし、本人の日本語に対する評価は低い。

日本語指導が必要な外国人の生徒の特徴として、日本人の友達が少なく、日本人の友達を増やそうという気持ちはあまり見られない。そして、同国人の友達を回顧し、同国人が多数通う学校へ行きたいと訴えている。

Xさん:日本人の友達はいない。学校の人だけ。(学校の友達とは)、一人か二人とは話す

けど、他の日本人とは話をしていない。日本人の友達を増やそうとはしていない。ネパールではたくさんの友達がいた。(中略) 東京には夜の学校がある。行きたいけど行けない。遠いから。いっぱいネパールの人、そこで勉強しています。それで、私もそこへ行きたいけど・・・ネパールの友達のことをたまに思い出して、泣きたくなった。(中略) 友達は、ネパールの友達が良いと思う。ネパールの友達関係では、いろいろな話をシェアする。この友達とは、ちょっと違う。日本人はそんなに他の人に対して気にしようとしなない。(2019年2月5日)

日本人との友人関係への違和感の一方で、教師については信頼を寄せている姿が見られる。Xさんは先生方の教え方について、良い印象を持っており、それが学習意欲や学校へのポジティブな感情に結びついている。

Xさん：先生方は、どのように教えると私が理解するかを考えながら教えてくれる。それが良いと思う。先生方は皆やさしい。日本語は難しいけど、がんばります。漢字は勉強します。(2019年2月5日)

特に、日本の小中学校での学びの経験の無いXさんが、日本の学校における教師との関係性や教え方に対して、肯定的に捉えていることがわかる。また、勉強についても困難さを感じてはいない。

Xさん：全てびっくりしたことばかり。ネパールでは、長い時間勉強をしなくてはならないし、教師はプレッシャーをかける。勉強をたくさんしなくてはならない。ノートにもたくさん書かなくてはならない。ここではプレッシャーはない。ここでは先生は怒らない。(中略) 私はこの教え方が良いと思う。(2019年2月5日)

2) 2学年時の状況

Xさんの学校生活での満足度はYさんのそれよりも高く、1年時には70%、2年時には75%と自身で評価している。日本語の学習や高校生活について、1学年時に比べて、より肯定的に捉えている姿がみられる。そして、「この学校は楽しい」と、1年前よりも学校が好きになったことを語っている。1年時には苦手な科目として答えていた体育の授業も、バレーボールやバスケットボールの試合がとても楽しいと表現している。また、小柄で細身のXさんは、体重も増加したらしく、体調も良い印象であった。

Xさん：今は日本語が好きですが、以前は好きではなかった。理解するのが以前はとても難しかったが、今は簡単になったからだと思う。(2020年2月4日)

日本語をほとんど理解することができなかったXさんの日本語力は向上している。しかし、依然として日本語の補習授業が必要であるレベルであることには変わらない。しかしながら、彼女自身、自分の日本語理解力について、「昨年度は10%、現在は40%」と答えており、日本語力が上昇したことを実感している。その理由を、「先生たちが教えた。自分では家で時々。学校で勉強したことを家に持って行って、英語に訳して、また日本語にして勉強する」と、先生方の教えと自身の努力によるものと捉えている。

実際のXさんの日本語力は4年時にN3の日本語能力試験を受けたが合格していない。Xさんの日本語理解力は、自己分析と乖離した状況と言えるかもしれない。しかしながら、日本語力が上がったと感じており、そこに教師の指導があると、自身で解釈している。

そして、2年生の時点で、XさんはA高校を卒業する意志を見せている。「(A高校を)卒業します。卒業できると思います。その後は大学へ行く」と、必ず卒業するという強い意欲が見られる。

この時点でXさんはITを学ぶため、大学進学を希望している。しかしながら、大学受験に向けて恒常的に勉強を行っているというわけで

はない。登校状況は、時期によって異なっており、毎日学校へ行くこともあれば、休みがちなこともある。Xさんの場合、2年時当初は授業前に多文化共生推進員が実施している「学習サポート」に自主的に参加していた。Xさんによると、「日本語が上手になりたかったので、日本語を勉強しなくてはと思った(2020年2月4日)」との動機で、毎回参加していたそうである。しかしながら、2学期になると、学習サポートを担当する先生を「好きではない」との理由で、行かなくなってしまった。

つまり、Xさんの事例を通して、日本語指導が必要な外国に繋がる生徒の場合、同世代の交友関係が希薄なこともあり、教師への期待は高く、先生との関係性が、学習行動に大きく影響している。

Xさんの場合、教科の学習については、数学、英語、社会は「大丈夫」、理科と国語は「まあまあ」と自己評価をしており、「先生がとても楽しい」と表現する教科もある。その一方で、定期試験については、「問題がわからない。問題を読むときはちょっと困る。英語も時々質問(の意味)がわからない」と語っており、日本語力の向上を感じつつも、相変わらず、日本語の困難さを感じている。しかしながら、「日本語を学びたい。今、勉強をしておかないと、後で困ったことになる。だから学校に来ている」と、学校へ通う動機について、将来を見据えた上で語っている。

また、Xさんの日本での生活についてのストレス感は低い。日本に来てから母語を書くことはしていないが、ネパール語の新聞を読むことができ、ネパール語を忘れてはいない。Xさんは17歳で来日しており、中等教育は母国で受けているため、たとえ日本の高校で学ぶことになった場合でも、母語を忘れてしまうことを不安視する語りはみられない。これは後述するZさんの例とは対照的である。

一方、Yさんの場合は、学校生活の満足感は1年時60%であったが、2年時には40%に下がっている。通学状況も、30回ほど休んだと語っており、自身も高校生活について、「頑張ってい

ない」と語る。

Yさんの日本語力は向上したと考えられるが、自己評価は低く「去年よりも上手になったんじゃない」との筆者の問いかけに、「(自分では)思わない」と答えている。Yさんは、日本語力に自信がないことを1年時にも語っていたが、2年時も同様に「自信がない。(間違えるのは)恥ずかしい」と言う。

2年時のYさんは、自信の喪失とともにやる気が無くなってしまったこと、日々、「つらい」と感じていることを訴えている。この頃のBさんは、コンビニでのアルバイトも、覚えることが多すぎてうまくいかず、1か月で辞めている。様々なことがうまくいかず、人と話すことも嫌だと感じる時期を過ごしている。

XさんYさんの性格はかなり異なっている。どちらかというストレスを抱えず、学校を楽しんでいるXさん、自己評価が低く日々の生活のつらさを訴えるYさん、その二人がなぜA高校を卒業することができたのだろうか。

3) 4学年時の状況

最終学年時にXさんと話をした際、Xさんは4年間を振り返り、「4年間通えると思っていた(2021年12月21日)」と語る。その理由として重要だったのが、先生との関係性であった。「学校の先生が優しい。だから、学校が好き。先生方が優しく好き(2021年12月21日)」と答えている。

Xさんは4年生になり、アルバイトの時間を増やし、週に4日間、コンビニでレジや掃除の業務についている。インタビューの時点で、コンビニのアルバイトは9か月続けており、それ以前のアルバイトが土日のみ、母と同じ弁当屋で働いていたことと比較すると、活動の幅が広がっている。また、当初は大学への進学が希望であったが、専門学校へと進路変更したものの、進路変更も肯定的に捉えている。

4年間高校へ通い、本人は「1年時よりもずっと日本語ができるようになりました。読んだり書いたりするのは難しく、半分はわからないけれど、相手が話したことはだいたいわかる(2021年12月21日)」と認識している。Xさんの交

友関係は1年生時とそれほど変わっておらず、一部の日本人生徒と外国に繋がりのあるYさんと話をする程度である。

4年間を振り返って、一番楽しかったことは、体育の授業で、苦手だった体育の授業で球技に取組み、できるようになったことを肯定的に捉えている。逆に辛かったことは、日本史や国語が頭に入らず、テストで良い点が取れないことを挙げている。そうしたつらい時に支えてくれたのが先生方で、日本語の先生が教えてくれたそうである。また、困ったことがあった場合の相談を担任にしている。

教師に支えられて高校生活を送り、これまでに学校を辞めたいと思ったことはない。結局、Xさんはいくつか専門学校を受けて、その中の1校に合格し、専門学校へ進学することとなった。

一方、Yさんは、4学年の夏に就職が決まり、9月から、昼間はその就職先の企業で働いている。登校前に仕事に従事しているため、かなり疲れている様子であったが、その表情は明るかった。毎日働くようになってから、生活のリズムが一変したそうである。以前は、昼間に起床していたが、今は朝5時に起きて出社しており、「大変」と語るものの、休まずに会社にも学校にも通っている。その状況を、依然のように「つらい」とは表現していない。会社と学校を両立する生活をする動機を聞くと、「卒業したいから。自分のため、将来のために(2022年1月11日)」と語る。将来的にも今の仕事を続けるとのことで、その理由を「良い会社なんで、人も優しいし、英語も使える(2022年1月11日)」と話す。

Yさんの場合、日本語を間違えると恥ずかしいという気持ちが先にあり、緊張してしまい、日本語が出てこないため、話すことへの苦手意識があった。しかし、Yさんの働く会社は、日本語がわからない場合には英語を使っても良いとする環境で、Yさんの気持ちを楽にしている。実際に、会社ではできるだけ日本語を使うものの、わからない時は英語で話をしているとのことである。Yさんは、日本語を発することが苦手な生徒であるが、その気持ちは高校生活の4

年間、変わってはいない。しかし、日本語で話すことができない場合に英語を使うことができる会社の環境は、日本語の苦手意識を和らげることに役立っている。

また、Yさん自身が感じる幸福感が上昇していることも特筆すべき事柄である。2年時に25%だった幸福感が4年生では40%に上昇している。そして、「この学校に来てよかったと思いますか」との筆者の質問に、「はい」とはっきりと答えている。その理由を尋ねると、「色々なことが学べるから。先生方も、なんて言うかな、サポートしているから(2022年1月11日)」と語る。

母国へ帰る¹⁰⁾という気持ちは弱まり、1、2年時に語っていたフィリピンの大学に行きたいという気持ちも無くなり、会社で定年まで働きたいという希望を抱いている。そもそも、その会社を紹介したのはA高校の就職担当の教師で、先生に勧められて行ってみたら「良い会社」だったそうである。本人は、会社の雰囲気や「怒られない、みんな優しく安心する」と表現している。

日本語については、この時点で、「書く方は、まあまあ自信があります(2022年1月11日)」と語っている。Yさんの口から、この4年間で「自信がある」との発言を聞いたことはなく、就職を経て、日本語にも自信を持つ方向へ変化していることがわかる。

Yさんは筆者との会話の中で、高校での4年間で自分が変化したこと、それを後押ししたのが教師であったことを述べている。

Yさん：自分の弱弱点と強弱点を知っていることが、私が変わったところです。

筆者：なんで変わったのですか。

Yさん：なんでだろう。多分、先生方が私を助けてくれて、そして私の背中を押してくれました。自分自身でも前に進もうとしたし、先生方が私をエンカレッジしてくれました。特に就職については先生が。(中略)担任の先生の言葉もすごいです。私のことをよく知っています。激怒しながら、「あなたにはでき

る」と言ってくれて、私は先生に勇気づけられました。(2022年1月11日)

そして、高校生活の中で一番覚えている事柄として、修学旅行で担任の先生と話をした時のことを挙げ、普段は時間が無く、なかなか話すことができないことを「悲しかった」と、もつと先生と話をしたかったと語っている。

4) 気持ちの変化

XさんYさんの語りを通して、A高校での4年間を支える上で、教師の言葉、教師とのコミュニケーションが重要な要因であったことがわかる。Yさんは、かつて学校を辞めたいと考えていたことがある。友達が退学や転校をし、自分も退学したいと考えていた。しかしながら、実際には退学も転校もせず、4年間通学をして卒業に至っている。XさんYさんともに、全く性格の異なる生徒の高校生活を支え、卒業をすることへと導いた最大の要因は、本人の努力や本人の思いであるが、その背景の中で、重要な位置を占めていたのは教師との関係性であることが明らかとなった。

しかしながら、A高校定時制は他の定時制高校同様に、中途退学や転校をする生徒は少ない。2018年度入学生のうち、日本語指導の必要な外国に繋がる生徒4名のうち2名が、2年生までに退学・転校をしている。それでは、卒業に至る生徒と転校をする生徒との間にどのような差異が見られるのだろうか。

5. 転校をした生徒の状況

2年時の途中で転校をしたZさんの状況について見てみたい。Zさんが来日したのはA高校に入学する1年8か月前である。14年前に来日しレストランを経営する父、パートの仕事をする母、単位制定時制高校へ通う姉、日本の中学校へ通う弟と暮らしている。

日本の中学校への登校経験はなく、母国ネパールで9年生(中学校3年生)の途中まで就学をした後、日本へ来た。彼女自身は、6年間別れて暮らしていた父母に会うつもりで来日し、一時的に滞在するものと考えていたが、父母に

「ここに住んでいる方がいい」と言われ、そのまま居住することになった。来日後8か月間は何もせずに家にいたそうで、その後、夜間中学校に4か月通い、夜間中学校の先生の紹介でA高校を受験している。

Zさんの語りとして特徴的な事柄は、Zさんが現状の生活に満足しておらず、様々な不満や葛藤を語っていることである。例えば、「私は今も帰りたい。いとこは私と一緒に勉強をした。一緒に勉強をしたい。だからネパールに帰りたい(2019年2月12日)」と、母国に帰りたい思いを語る。

また、姉の通う学校と比較して、A高校での状況に孤独感を訴えていることも特徴的である。

Zさん：お姉さんが勉強している学校は全員ネパール人。だから楽しみをやっている。ここでは(私は)一人だけだから。ここにいるもう一人のネパール人は年齢が違う。4歳上だから、あまり話も合わない。時々Yさんと話をするが、他の人とは日本語がわからないから、あまり話せない。(2019年2月12日)

また、日本語のハンディキャップがあり、自分の望む勉強ができないこと、自身の成績の評価も思うような状況ではないことへの葛藤がある。さらに、自分の母語を忘れていくことを困惑している様子も見られる。

Zさん：目標は、良い学校(大学)に行きたい。大学では、勉強したいこともあるけれど、日本にいたら、漢字も難しいので、どうしようかな。漢字が難しいから、今の学校の勉強に頭を使っている。ネパールの学校では、トップテンの中だった。(中略)日本に来てから、英語とネパール語をどんどん忘れていく。ネパール語を今は書けない。全然、書けない。私の名前を書くのも大変になる。練習をしないと大変みたい。英語は難しいのを読むときは難しい。大変みたい。忘れてきている。すごく困る。(2019年2月12日)

友達がいないことを語り、日本に移住をすることによって、自身の性格も変わってしまったと感じている。そしてそれは、外へ行きたくない、人と会いたくないという気持ち、話をしたくないという気持ちに繋がり、心理的にも非常に追い詰められている状況であることがわかる。

Zさん：友達がいないから遊べない。いつも仕事と学校がない時は家にいる。携帯がある時はずっと携帯。時々ネパールの友達の写真を見ると、「あー、私もネパールにいた時は友達がいたのに。(中略)ネパールにいる時は、物静かな性格ではなかった。楽しい人だった。今は静かになったと思う。以前は、(生活を)楽しんでた。でも、ここにいたら、どこへ行くときも、家族で外出する時も「ヤダ」と思う。あまり行きたくないし、あまり話せない。メッセージはいいけど、ネパールの友達と話すのもヤダ。話はヤダ。日本に来てから友達がいないから、ずっと中に住んでいるから。(2019年2月12日)

性格も変わり、外へも出なくなってしまう、このような変化が、勉強にも影響を及ぼしている。勉強への意欲がありつつも、本を見るのも嫌だと感じ、本を見ることができないと訴える。また、好きな教科についても、日本語がわからないことに呼応して、悲観的に考えてしまっている姿がうかがえる。

Zさん：好きな科目はあったけど、ここにいたら、「あー」と思っている。数学は好きだけど、ここで教える先生の言葉はわからないから、だんだん難しくなるかなと思っている。(2019年2月12日)

また、人への恐怖心も訴えており、Zさんは、1年生の後半には、心理的な支援が必要な状況にあった。しかし、その気持ちを周囲に伝えることはしていない。

さらに、全日制高校へ行きたいと考えていたにも関わらず、夜間定時制高校へ来たことも、

Zさんの高校生活への葛藤の要因となっている。Zさんは昼間の学校へ行きたいと思っていたが、全日制の学校に転校することは難しい。A高校の教師からは、全日制の学校は漢字が読めないと勉強についていくのは難しく、全日制に入るだけで1年間にかかるからと言われたそうである。「日本語がわからないなら、ここよりも難しいから、入らない方が良い」と、転校についても否定的に言われたと語っている。

教師のアドバイスに、くやしさを感じながら、一度は転校を思いとどまったものの、Zさんは、筆者のインタビューの半年後には、A高校を転校している。

Zさんの気持ちを改めて振り返ると、XさんYさんと比べて、高校生活について肯定的に捉えている部分がほとんどなかったことがわかる。不満感や悔しさ等の語りに終始し、Zさん自身がA高校で学ぶことを納得している状況は見られなかった。また、教師とのコミュニケーションについても、信頼感というよりもむしろ、教師に否定をされたことが心に残っている状況であった。

考察と今後の課題

X、Y、Zの3名の外国に繋がる生徒への調査からは、入学した学校を卒業する生徒と転校をする生徒との間に明らかな差異が見られた。生徒達は、日本語が不得手であることにより、生徒自身の自己肯定感が歪められ、精神面でも追いつめられていた。高校生活全体を振り返ってみると、客観的な生徒の日本語力の定着よりもむしろ、高校生活において日本語力が上がっていると感じる生徒の主体的な日本語力への認識が、卒業へと結びついていた。

さらに重要な位置を占めていたのは、教師との関係性であった。高校入学当初、本国にいた頃の友人との交流や学校生活と比較をして悲観していた生徒が、日本の高校に入学し通学をするという現状を受け容れ、前向きに捉え始めるには、1年以上の時間を費やしている。生徒によって時間は異なるものの、現状への不満から

脱し、現状を受け容れることができれば、A 高校で 4 年間を過ごし、卒業をしている。その現状を受け容れる背景に、教師との関わりがあったことが明らかとなった。

不満や葛藤の時期を乗り越え、現状を受け容れるようになると、学校の楽しさを示す言葉を発するようになった。その背景には、日本語が上達したという自己の感覚とともに、教師への信頼がある。

しかしながら、教師であるということだけで、信頼関係を結ぶことができていないわけではない。事例から見る通り、教師の言動や態度により、信頼関係を結ぶことができず、学習意欲がそがれてしまうこともある。生徒達の高校生活及び卒業までを支える動機は、強固なものではない。困難と葛藤を抱える中で、教師との関係性や働きかけが、高校生活を支える要因となっている。

卒業まで通い続けた生徒達は、4 年間 A 高校に通学し、当初語っていた将来像と異なる進学先・就職先を選ぶこととなった。進路の変更も肯定的に捉え、自分の弱点と長所を理解しながら、就職先でも生き生きと働いている。こうした変化をもたらしたのも、教師による働きかけであった。

A 高校では、日本語指導を積極的に行っていたわけではない。日本語指導が必要な生徒を取り出して授業展開をしていたのは、国語等一部の教科に限られていた。それゆえ、生徒達にとっては、各教科の内容を全て理解することは難しかった。日本語で授業を受け、試験を受け、日本語でコミュニケーションをしなくてはならない環境が、生徒達にとっていかに困難であったかは想像に難くない。しかしながら、本研究からは、日本語指導が必要な外国に繋がる生徒を卒業へと導く要因は、言語の問題だけではなく、彼女たちを支える教師との関係と教師の働きかけにあることがわかった。教師の働きかけは、確実に生徒たちに響いている。

定時制高校には日本語指導が必要な高校生が多数進学している。そして、全日制に比べて中途退学者が多いことも指摘されている。本研究は、こうした状況を改善するための方法を示唆

している。定時制高校は、生徒と教師が信頼関係を築くことによって、外国に繋がる生徒が、日本社会に巣立つための成長を支える学校として機能しうるのである。

本研究において、日本語指導が必要な生徒の学校への適応、そして卒業へと結びつける要因に、生徒の教師への信頼感という心理的要因が大きく関係していることがわかった。これは、教師への信頼感に、生徒の個人的な心理的要因が関連していることを明らかにした中井・庄司の研究結果とも重なるものである(中井・庄司, 2009)。中井・庄司の研究では、生徒の教師への信頼感が「安心感」「不信」「正当性」の 3 側面で捉えられることを明らかにしている(中井・庄司, 2006)。

日本語が不自由である外国に繋がる高校生の教師への信頼感については、言語の問題や文化の問題も影響しているものと想定される。文化も言語も異なる生徒が抱く教師への信頼感を規定する要因を分析するには、さらなる研究が不可欠である。

引用文献

- 小川洋二(2020). フィリピン系高校生の事例研究—夜間定時制高校の調査から, 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 355, 31-48.
- 許佳辰 (2018). 外国人ニューカマー青少年の進路選択と出身国の社会的状況—名古屋市と豊田市における中国人ニューカマー後期 1.5 世代を例に—, 東海社会学会年報 10, 144-157.
- 黒田協子(2021). 外国につながる生徒の「意識化」を目指した課題提起型教育の実践: 定時制高校でのアクションリサーチをもとに, 上智大学教育学論集 55, 77-91.
- 小島祥美 (2016). 外国人の就学と不就学—社会で「見えない」子どもたち—, 大阪大学出版会.
- 埼玉県教育委員会 (2021). 令和 4 年度入学者選抜実施要項・入学者選抜要領, <https://www.pref.saitama.lg.jp/f2208/r4zissiyoukou.ht>

ml?msclid=3eaedefdab2911ecbb0b2c3e32718299https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/200510/10dai9.pdf (閲覧日 2022.3.7)

佐久間孝正 (2015). 多国籍化する日本の学校－教育グローバル化の衝撃－, 勁草書房.

高松美紀 (2011). 多文化を背景に持つ高校生の学校適応に関する研究－一定時制高校を事例に－, 日本教育社会学会大会発表要旨集録 63, 316-317.

趙衛国 (2010). 中国系ニューカマー高校生の異文化適応－文化的アイデンティティ形成との関連から－, 御茶ノ水書房.

角田仁 (2012). 多様化する夜間定時制高校－外国につながる生徒をめぐる公正さの概念の変遷－, 異文化間教育 36, 26-39.

東京都教育委員会 (2020). 外国人生徒の都立高校受検について, https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/admission/high_school/archives/interview/exam_foreign_students.html?msclid=5a747c1fa8f611ecb5b8eceb5e627189#moku4 (閲覧日 2022.3.7)

中井大介・庄司一子 (2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因, 教育心理学研究, 54,453-463.

中井大介・庄司一子 (2009). 中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連, 教育心理学研究 57,49-61.

文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 (2019). 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成30年度)」の結果について, https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_02.pdf (閲覧日 2022.3.5)

文部科学省 (2020). 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成30年度), https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_02.pdf (閲覧日 2022.3.5)

文部科学省 (2021a). 外国人児童生徒等教育の現状と課題, https://www.mext.go.jp/content/20210921-mxt_kyokoku-000017928_13.pdf (閲覧日 2022.3.5)

文部科学省 (2021b). 高等学校における日本語指導の在り方に関する検討会議, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/166/index.html (閲覧日 2022.3.5)

文部科学省 (n.d.). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査－用語の解説, https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm (閲覧日 2022.3.5)

注記

- 1) 文部科学省が2014年度から、各学校長の責任において、小中学校において、「日本語指導が必要な生徒」に対して、「特別の教育課程」を定めることができるようになったのも、このような流れの一環である。
- 2) 文部科学省「学校基本調査」によると、定時制高校の学校数のピークは昭和30年で、その数は3,188校であったが、令和3年には634校となっている。また、定時制高校の生徒数のピークは昭和30年の54万人を数えたが、令和3年には7.5万人となっている。
- 3) 地域格差については、(小島, 2016) が詳しい。
- 4) 佐久間が事例として挙げている F 定時制高校は、2007年4月にいた新入生50人は、卒業時の2010年には29人に減少しているとのことである。
- 5) 外国に繋がる高校生の異文化適応を扱った研究として趙の研究が挙げられる。趙は中国系ニューカマーの全日制普通科の教育困難校と総合単位制高校に通う生徒を対象に、高校を卒業した生徒と退学した生徒について、主に文化的アイデンティティへの影響の面から分析している(趙, 2010)。
- 6) 2018年度入学後、少なくとも、毎年1回以上、A高校にて聞き取り調査を実施してきたが、2020年度については、コロナ禍のため緊急事態宣言が出されており、高校での聞き取り調査を自粛したため、該当者に聞き取り調査を実施することができなかった。

- 7) 「日本語指導が必要な外国に繋がる生徒」は筆者が A 高校で調査を開始した時点で 4 名在籍していたが、1 名は学籍はあるものの、既に登校していなかったため、実際にインタビューをすることができたのは 3 名であった。
- 8) 父親は日本人であるものの、一緒に暮らした経験はないという。
- 9) 多文化共生推進員とは、日本語指導が必要な生徒の在籍する学校で、日本語指導や教育相談等の支援を行う業務を行う者を指す。
- 10) X さんは 1 年時に自身のアイデンティティを尋ねた際、フィリピンと答えている。

Factors for Students Connected to Foreign Countries to Graduate from High School: Case Studies of a Part-time High School

Makiko HABAZAKI

Ichiko SHOJI

Part-time high schools have the problem that the ratio of students who drop out or change schools is high. A large number of students connected to foreign countries who need Japanese language learning are enrolled in part-time high schools. Their dropouts and transfers are also serious issues. Narrative of foreign students attending part-time high schools showed a clear difference between students graduating from the school and students transferring to another school. The factor leading to graduation of foreign students who need Japanese language learning was not only language learning but also a relationship of trust with teachers. When they entered high school, they were pessimistic compared to their school life in their home country. It takes more than a year for students to accept the current school life in Japanese high schools and begin to positively grasp the current state. When they could get rid of their current dissatisfaction and pessimism, they could go to high school every day for four years and graduate. It became clear that the relationship with the teachers had a great influence on the factors that accepted the current situation. By building relationship of trust between students and teachers, part-time high schools can function as schools that supports the growth of foreign students to adapt in Japanese society.